

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26870061

研究課題名(和文) 異質性受容を可能にする思想と環境の要件 秋田県仙北市における事例調査研究

研究課題名(英文) Philosophical and Environmental Conditions for Accepting Otherness

研究代表者

牲川 波都季 (SEGAWA, HAZUKI)

関西学院大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：30339733

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、外国人のグリーン・ツーリズム受入を成功させてきた、秋田県仙北市の農家を対象に聞き取り調査を行い、その成功の思想的要因を明らかにするものである。中でもA夫妻の事例を分析した結果、自らとは異質な存在であるからこそ、その他者と伝え合い出合い続けたいと願うという、他者認識のあり方が描き出された。ただしこの他者認識において、外国人であることに特別な重みは付与されていなかった。他者とコミュニケーションしようとする意志は、特定のカテゴリーの重視からは生まれてこない。こうした他者認識のあり方が、今後の外国語教育や異文化間コミュニケーション教育がめざすべき新たな教育的課題である。

研究成果の概要(英文)：In this research, I interviewed farmers in Senboku city, Akita prefecture, who had successfully accepted foreign tourists' green tourism, and clarified the philosophical factors of their success. As a result of analyzing the interview data, I found their recognition of others which they would like to communicate with others and continue to meet with them because of being heterogeneous from themselves. However, in this recognition, no special weight is given to being foreigners. Willing to communicate with others does not arise from emphasis on specific categories. For future foreign language education and intercultural communication education, it is a new educational subject to nurture these ways of recognizing others.

研究分野：日本語教育

キーワード：他者認識 異文化 グリーン・ツーリズム 外国人介護士 外国人看護師 接触場面

1. 研究開始当初の背景

国内の総人口は、2011年の1億2778万人から、2020年・1億2410万人、2030年・1億1662万人へと加速度的に減少するとされる(国立社会保障・人口問題研究所、2012、『日本の将来推計人口』)。また労働力人口は、最悪の場合2010年度比で、2020年度までに360万人、2030年度までに850万人の減少が予想されている(雇用政策研究会、2012、『雇用政策研究会報告書「つくる」「そだてる」「つなぐ」「まもる」-雇用政策の推進』)。総人口・労働力人口の急激な減少という現実からすれば、日本社会への移民受け入れ数増加は近い将来の課題であり、「国際化拠点整備事業(グローバル30)」(2009年、文部科学省)や「グローバル人材育成推進事業」(2012年、文部科学省)の始動は、この課題に対応するための取り組みの一つと考えられる。これらの取り組みでは、外国語運用能力と外国文化の経験・理解が、協働・共生のために必要な前提として位置づけられている。しかしここには、日本人の大部分が学校教育課程を終えており外国語や外国文化を組織的に学習できるわけではないという実効性にかかわる問題だけでなく、これらの能力・経験をもたない者を、他者受容のための能力を欠いた存在として差別化するという思想上の問題がある(牲川、2013、「誰が複言語・複文化能力をもつのか」)。

調査者は、秋田県内の高等教育機関に在籍する留学生を対象とした農業体験事業を2009年度に立ち上げ、以来秋田県仙北市のグリーンツーリズム(以下、「GT」と略す)運営農家に留学生受け入れを依頼してきた。当地は30年前から都会の小学生などを自宅に招き入れ、農業体験を支援する活動を続けてきたが、外国人を団体で受け入れる経験は応募者の事業が初めてであり、かつ日本語以外で不自由なく留学生と意思疎通の図れる者は皆無であった。にもかかわらず事業終了時には、留学生・農家双方から農業体験事業に参加して非常に満足したというアンケート結果が得られてきた。

この結果を受け、2012年度から科研費(挑戦的萌芽研究、24652098)を得て、各受け入れ農家に対する聞き取り調査を実施し、農業体験事業の際に起こったトラブルとその際の解決方略を事例集として公開した(牲川、2013、『農家に学ぶ留学生受入の思想と方法—秋田県仙北市西木町のグリーン・ツーリズム事例集』)。同時に、留学生の農業体験事業の参与観察を行い、会話分析から相互の調整行動として意思疎通の方略を明らかにした(市嶋・牲川、2013、「接触場面におけるカテゴリー生成と変化のプロセス—母語話者と非母語話者の調整行動に注目して」日本語教育学会研究集会・口頭発表)。

これらの研究は、外国語や外国文化に特別なつながりをもたない人々が、いかに外国人やその他自らにとって異質な者と交渉し問

題を解決しうるのか、その方略を明らかにした。

市民がすでに有しているまたは有しうるものとして、異質な他者との問題解決・交渉の方略を描き出す成果であり、複数の外国語の運用と外国文化との接触経験、その教育を重視する従来の複言語・複文化主義の能力観に対し、再構築を迫るものと言える。しかし以上の調査では、なぜ当地の人々において、そうした問題解決と交渉の方略の獲得が可能になったのかという要因の解明には至らなかった。

2. 研究の目的

本研究では他者受容の方略を可能にする要因を析出し、異質な他者を受容するために必要な思想とは何か、またそれはいかにして育みうるのかを、秋田県仙北市のGT運営農家とそれを取り巻く農村コミュニティという具体事例から描き出すことをめざす。そしてこれにより、日本語教育や外国語教育、異文化間コミュニケーション教育に、新たな教育目標と環境設計のあり方を提案したい。

調査者のこれまでの調査からは、仙北市で生まれ育ったGT運営農家は、限られた外国語や外国文化の学習・経験機会しかもっていないが、言語・文化的に異質な他者と十分にコミュニケーションを成功させようことが判明している。GT運営農家は留学生と自己とを多種多様なカテゴリーでとらえながら、お互いが有している言語・非言語能力を協働的にもちいることで、新しい知識の交換を図っていた。

しかし、方略を実践しようとする意志は、他者を受容することの意義が理解されていなければ生まれえない。自身の領域と認識される場に他者を招き入れ、しかも一方的な受容でも提供でもなく、相互の生に資する知の交換が可能になるような場として再構築していくためには、なぜ異質な存在を自らのテリトリーに招じるのかという他者受容を支える思想が不可欠である。本研究ではまずGT運営農家への個別聞き取り調査を行い、GTでの他者受け入れを開始し続けてきたのか、その背景として他者認識のあり方を導出する。次にそれら思想群をもつにいたった経緯を、異質な存在と接触した特別な経験の有無や外国文化・外国語学習経験、成育地域からの移動経験などを確認しつつ、個人史として聞き取っていく。これにより、他者とともに生きるための思想育成が可能となった個人史的要因を探り出す。

3. 研究の方法

調査者は、2012年4月より、仙北市のグリーン・ツーリズム運営農家が、他者をいかに受容してきたかに関し調査を実施してきた(科研費・挑戦的萌芽研究)。これまでの調査から、個別のトラブル事例への解決方略とともに、直接に外国語を用いず意思疎通す

るためのコミュニケーション方略が解明された。しかしこれらの調査では、個別の方略の実践を可能にする、より大きな枠組みでのGT 運営農家の思想は捉えられていない。問題解決事例では、通訳者が身近にいても頼らずボディランゲージを多用すること、その背景に、どうしても直接に体験者とコミュニケーションを取りたいという強い意欲があった例などが見られた。また、参与観察に基づく会話分析からは、GT 運営農家は留学生との会話において、相互を位置づけるカテゴリーをさまざまに変えていくことで、平等かつ互恵的に意思疎通を図っていたことが明らかになった。

こうした問題解決方略や会話分析結果の事例からは、言語での伝達によらずとも意欲があれば意思疎通は可能である、仲介をはさむより直接のことばの交換がはるかに重要であるといったコミュニケーション観や、人間のもつアイデンティティは多種多様でありえ固定的ではないといった人間観が方略の実践を支えていると予想できるが、個別事例を対象とした調査からは、思想の内実やそれが創出された背景は詳らかにできなかった。

そこで本研究ではまず、GT 運営農家一人ひとりに対し、生い立ちからGT を運営する現在に至る個人史についての聞き取り調査を実施した。これにより自らにとって異質な他者を相互に満足する形で受け入れるために、どのような思想をいかに構築してきたかを跡付けることをめざした。具体的には、2012年実施の問題解決方略に関する聞き取り調査協力者のうち、同様の目的で予備的な調査を行った1軒を除く6軒を対象に、再度聞き取り調査を行った(2014年8月)。予備調査の対象となったGT 運営農家も含め、これら7軒は仙北市で長年農家民泊事業に携わっており、外国語学習や外国文化の経験の有無、他地域への移動経験を確認しつつ、農家民泊事業を開始するに至った経緯を中心に尋ねることができた。しかし、経歴をまとめるにあたり情報が不十分な点があったため、事実確認を目的とした聞き取り調査を再度実施した(2016年8月)。なおこの際には、大学生の農家民泊受け入れプログラムに同行し、フィールド調査も行った。

次に、本研究期間以前の聞き取り調査結果も合わせ、問題解決方略やコミュニケーション方略の実現を支える要因を考察した。考察を進めるうちに、方略を用いようとする意欲を支えるものとして、他者の存在をいかに意義付けているかという、他者認識のあり方がもっとも重要な観点として浮かび上がってきた。また、そうした他者認識を育んだ環境的要因として、出稼ぎや嫁・婿入りという形での異質な他者・地域との接触経験、さらなる他者受容を可能にさせる安定した地域コミュニティの存在などが仮説的に理解された。しかしながら、他者認識のあり方には、

GT 運営農家ごとに、さらには同じ農家内でも各人ごとに異なることも理解されてきたため、秋田県仙北市のGT 運営農家として一括して扱うのではなく、個別事例を詳細に検討していく必要があると判断した。そこでまず2012年にフィールド調査を行い、コミュニケーション方略の考察を行ったA夫妻(妻=A1, 夫=A2)の聞き取り調査結果に絞って分析し、それぞれの他者認識のあり方を解明することとした。

4. 研究成果

分析の結果、A1・A2の他者認識の特徴は以下のようにまとめられた。

【A1の他者認識】

- (1) 他者を、自身とは異なる地域の出身者、自身とは異なる職業従事者として捉えている。
- (2) (1)の他者とのやりとりにより、自身の身近な周囲に新たな価値を見出している。
- (3) (2)で発見した新たな価値を、他者に知らせたいという希望をもっている。
- (4) (1)(2)(3)の循環が、新たな他者の受け入れ継続の動機づけになっている。

【A2の他者認識】

- (1) 他者 = 子どもたちを下記のように捉えている。
国籍や年齢にかかわらず、共通に「かわいい」。
属性ごとに、異なる特性をもつ。
個人ごとに、異なる性格・特技をもつ。
自分自身と、共通する部分をもつ。
- (2) (1)の子どもと、加えてそれにつながる他者との親密な関係作りを希望している。
- (3) (1)(2)の循環が、新たな他者の受け入れ継続の動機づけになっている。

A夫妻は、2009年開始の外国人留学生受入プログラム以前には、非母語話者との豊富な接触経験はなく、多様な言語・文化を受容するための教育経験も特段もっていなかった。それにもかかわらず、言語的リソースが限られた外国人留学生らと、相互に満足感を残すやりとりを実現していた。

なぜこうしたやりとりがA夫妻には可能なのか。その答えを探るべく、本研究は、聞き取り調査を、他者をどのようなカテゴリーで捉え、またその他者との関係にどのような意義を見出しているのか、という観点で分析した。

A1にとって、農業体験に受け入れる他者は、他地域出身あるいは他業種に就く者であり、A1は、そうした他者との語り合いから、この地で農家を営むことの独自の価値を発見し、発見した価値を新たに出会う他者に伝えたいという希望をもっている。またA2に

とって、他者は根本的には同じ人間として共感し慈しむべき存在であり、したがって、それぞれにまったく違った性格や関心をもつ者としても捉えられている。A2 はまた、他者を比較的大きなカテゴリーで捉えようとする傾向も持つが、それは一人ひとりを知っていくためのプロセスの一つである。

本研究の問題意識は、外国人との接触経験や、異言語・異文化についての教育機会や意欲をもちにくい高齢者こそが、被介護/被看護者として外国人と身近に出会うことを想定し、その出会いに際し高齢者がもつべき他者認識のあり方を、A 夫妻をモデルケースとして示すことにあった。分析の結果、A 夫妻は見知らぬ他者を、自分とは異なるからこそあるいはみな異なりみな愛しいからこそ、関係を結びつづけたい者として捉えていたことがわかった。この他者認識のあり方は、意思疎通の困難を工夫で乗り越えようとする意志を支えるとも考えられ、外国人介護士・看護師とやりとりする高齢者にとって参照すべき認識と言えよう。

しかし A1 と A2 の語りから見てきたのは、夫妻が出会い続けたい他者は「外国人」ではないということである。A1 にとっての他者は自分とは異なる地域出身・職業従事者であり、外国人は日本国内の他地域出身者と同じく、A1 の暮らしに光を当てる存在である。一方の A2 は、県内で学ぶ外国人留学生といったカテゴリーで、他者の状況を想像することもあるが、そうした理解の仕方は国内の中学生にも適用されており、他者より深い関係を作っていくためのプロセスである。みな違っておりみなかわいいという A2 の他者認識からすれば、外国人というカテゴリーが際立つことはない。

他者に対する認識のあり方は A1 と A2 の間でさえ異なっており、外国人介護士・看護師と接する高齢者に単純に転用はできない。しかし A 夫妻の他者認識が、自らにとって異質な存在を劣った者と位置付けさせたり、自身に合わせて変えさせるといった、排除や同化につながる関係をもたらさないことは予期できる。A 夫妻の他者認識は、未知で異なる部分をもつ他者とだからこそ、互恵的な関係を作ろう、工夫をして伝え合おうとする意志を支えるものである。この意志は、外国人といった特定のカテゴリーを重視することからは生まれてこない。

本研究の結果は、外国人といった特定のカテゴリーを際出せない他者認識のあり方が、外国人も含む他者と伝え合おうとする意志を支えることを示している。こうした認識のあり方が、今後の日本語教育や外国語教育、異文化間コミュニケーション教育においてめざすべき新たな教育的課題ともなるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

牲川波都季(2018年3月10日)。「異質性の認識 秋田県仙北市グリーン・ツーリズム運営農家の事例」言語文化教育研究会第3回年次大会(立命館大学衣笠キャンパス)。

牲川波都季(2014年7月30日)。「異質性受容を可能にする方略・思想・環境 秋田県仙北市のグリーン・ツーリズム事例より」関西学院大学日本語教育研究会第14回(関西学院大学上ヶ原キャンパス)。

〔図書〕(計 1 件)

牲川波都季, 2016, 『農家に学ぶ留学生受入の思想と方法—秋田県仙北市西木町のグリーン・ツーリズム事例集』(第3版)関西学院大学総合政策学部牲川研究室, 73.

〔その他〕

講演 牲川波都季(2017年8月15日)。「英語不要の異文化交流論—他者と生きるためには何が必要か」第40回ふるさと市民講座(滑川市民交流プラザ)。

講演 牲川波都季(2016年2月13日)。「ことばが堪能でないと創造的交流はできないのか」関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科 2015年度第2回言語コミュニケーションフォーラム(関西学院大学大阪梅田キャンパス)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

牲川 波都季(SEGAWA, Hazuki)
関西学院大学・総合政策学部・准教授
研究者番号: 30339733